

## 平成 23 年度若手研究者国際短期派遣事業滞在記

無機フォトニクス材料領域

徳田陽明

2011年11月14日～12月4日の日程でイタリア国サッサリ大学に短期派遣という形で滞在させて頂いた。このような機会を与えて頂いた関係各位に感謝申し上げます。当初の計画よりも短い期間となってしまっただけで少し残念ではあったが、公私ともに良い刺激を受け、有意義な時間を過ごすことができた。

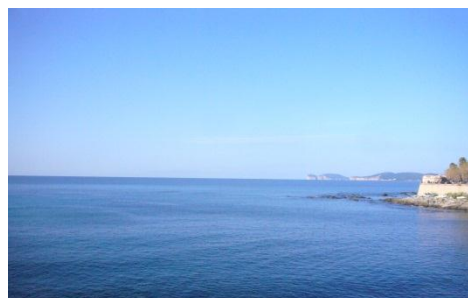


写真 アルゲロから望むポルトコンテ

私たちの発見した有機-無機ハイブリッド型マイクロ・ロールをバイオセンサーデバイスとして応用する

ことを目的とし、形成メカニズムの解明・構造制御・生体親和性の付与を試みて、一定の成果を上げることができた。この結果については近く専門誌に発表するので、そちらをご参照頂くこととし、以下では滞在中に感じた日本との違いについて記す。

ヨーロッパの研究スタイルを表す言葉として“働きすぎない”が良く知られている。確かに朝9時すぎから働き始め、夕方5時には帰路に就く。なぜこのようなことが可能なのだろうか。それは分業のお陰である。本来ならば一人で十分にこなせる仕事を分割することによって、社会全体の雇用を支えているように見受けられた。

翻って日本の研究者の立場を考えると、教育研究には直接的には関係のないような負荷がかかっている。しかし、ワークシェアによって雇用を生み出さざるを得ないような社会、すなわち“仕事の絶対量＝国民の総所得”が少ない社会と比べると、逆説的ではあるが、我々は恵まれているように感じた。成人が精一杯働ける社会は健康的である。

また、日本の科学技術の凄さを再認識した。滞在中に購入した簡単な工業製品でさえもすぐに壊れた。イタリア製ゆえに機能より美観を重視しているからだろうか。日本人は真面目で器用なので、壊れにくいものを作ると評価されるが、まさにその通りであった。そして、このことを誇りに思って良いことを知った。

街は一見すると綺麗だが、片隅にはゴミが落ちており、どこか薄汚れていた。彼らはそれを大きな問題とは感じていないようだった。一方、日本人は古来より綺麗好きで几帳面とされている。事実、ペリーが日本を訪れた際にも、“日本人はとてもきれい好きだ”と書き残している。このような精神構造が日本の科学技術の礎になっているのだろう。

イタリアは「自由」の国である。個性が非常に重んじられているともいえる。確かに工業製品本来の機能は劣っているかもしれないが、その一方で飛び抜けた性能を持っている。個性を重んじる国ならではのオリジナリティある製品である。

日本的が良いのか、イタリア的が良いのか。ありきたりではあるが、日本的な精神構造を持ちつつ、イタリア的なオリジナリティのある仕事をしたいと思う。和魂洋才である。